あつーくなる阿弥陀さん（高平田中）

高平の谷を流れる羽束川に阿弥陀橋という橋がかかっています。その西の山すそには小さいながらも村人によって大切に守られてきた阿弥陀堂があります。

阿弥陀堂には、おだやかな優しいまなざしの阿弥陀さまがまつられ、村人たちは朝に夕に手を合わせていました。

そのむかし、何者かがこの阿弥陀さまをぬすもうとしました。暗やみにまぎれ、お堂の扉をそうっと開け、阿弥陀さまを背負って逃げました。

ところが、阿弥陀橋にさしかかると急に背中が熱くなってきます。

「あつつっ！あつつっ！」

たまりかねて阿弥陀さまを降ろすと、泥棒はすぐさま川へ飛びこみました。背中を冷やし、やっとのことで橋の上へ上がったのですが、こわくなって阿弥陀さまには近づけません。泥棒は一目散に逃げていきました。

朝になり、村人が橋を通りかかると、阿弥陀さまが露にぬれてぽつんとおられるのです。

何事が起こったのかとおそるおそる近づき、そっとふれると、阿弥陀さまは温かく、何だかおこっておられるようなお顔です。阿弥陀さまをお堂にもどし、お身をぬぐってさしあげました。

すると、阿弥陀さまは前のように穏やかなお顔になられました。村人は思わず手を合わせて拝んでいました。

このことがあってから村人たちは、

「阿弥陀さまに悪い心でさわったから、あつーくなって不心得者をたしなめようとされたにちがいない。」

「ふしぎな力を持って村を守ってくださっている。」

「ありがたい。ありがたい。」

と、これまでにもまして阿弥陀さまを大切にしました。

それからというもの、人々はこの阿弥陀さまを「あつーくなる阿弥陀さん」と呼んで親しんでいます。